



片岡喜作隊長

振武特別攻撃隊長4～出撃前夜～

知覧基地への進出を翌日に控えた4月19日夜、隊員たちは、NHK小倉放送局の取材を受け、その心境や決意を語っています。放送は隊員が出撃、散華された後の5月10日夜、「出陣前夜の決死の声」との番組名で九州全域にラジオ放送され、それを西日本新聞が5月11日の朝刊で報じています。

出撃前夜の決死の声

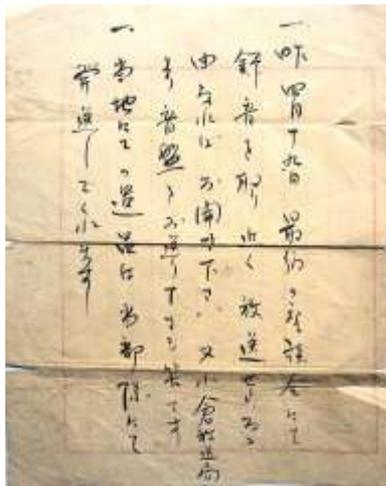
NHK小倉放送局の取材については、隊員の岡山勝己軍曹がその遺書に

二元気で征きます。不幸の罪幾重にも御許し下さい。大事決行も後数時間。19日録音を吹き込みました。近日、小倉放送局よりラジオ放送されます。また家に、軍からか、局よりレコードを送ってくれるはずで。勝己は笑って行きます。何時までも御元気で。祖母様達にも宜しく。御多幸を御祈り致します。

特別攻撃隊 振武隊々員

岡山勝己

父母上様
と記しています。



遺書裏面にある、片岡隊長の両親宛追記

片岡喜作隊長(中学33回)も両親宛の遺書に追記として

「昨四月十九日最後の座談会にて録音を取り 近く 放送せらるゝ由なればお聞き下さい 又小倉放送局より 音盤をお送り下さる筈です。 : :」

もとに届くことはありませんでした。

翌20日、隊員たちは小月基地から知覧に進出し、22日に知覧を出撃、沖繩本島名護湾にあった海上敵艦船群に突入、戦死されましたが、5月10日夜7時40分から、「出陣前夜の決死の声」との番組名で、約15分間九州全域にラジオ放送され、それを西日本新聞が5月11日の朝刊で次のように報道しています。

見出し

一億へ叫ぶ出撃前夜の神鷲 小倉から録音放送

『肚でぶつつかるよ』

内地暴爆 仇討に空母撃沈

※ 肚(はら 胆力、気力)

リード文

小倉放送局では十日夜七時四十分から全九州へ某基地にて振武特別攻撃隊出撃の前夜を捉えた録音放送を行ひ沖繩決戦に出撃する死生觀に澄み渡つた特攻隊勇士たちの肉聲を電波に乗せて戦ふ九州人の胸を力強い感激に揺つた。この特攻勇士の中には鳥取、佐賀、鹿児島出身の若武者も加はつてをり、語る語調はあまりに淡々としてじつとラジオに耳を傾けて勇士の心境を聴かうと緊張する人々の心底には國民的の神の聲とは思へないほど清澄な流れであつた。勝利へ進む哲學を説き若い曹長は飛行機を一機でも多く送れと銃後に訴え、死ぬのが面白くなつたといふ勇士たちの聲にもつともつと銃後は頑張らねばならぬ。一死必沈の緊張に包まれた出撃前

夜といふのに勇士たちはさらさらと死生觀をもらし朗らかにお國藝を披露しあつて死に赴く人とは思へぬ静かな出撃前夜の十五分間録音が終わった。以下は勇士たちの肉聲である。

本文

立川小倉放送課長

御出發前夜御多忙のところ恐縮でございますが、皆様の張り切つたところからまづお願ひしたい。

片岡隊長

別にお話することはございませんが、私の隊の特攻隊のことを一つ話したいと思つてゐます。いま私の部下は上も下もなく、ただどうして敵に打つかるか、そればかり考へてをります。私が一番苦勞するのはかういふ立派な部下をどうして亡くするかが私の一番の苦勞です。隊長としては何もいふことはありません。部下がよくやつてくれる。そればかり私は考へてをります。

牟田少尉

最近の心境は、私はかうしてゐるのが非常に辛いのです。それでどうか一日でも早く出てゆかなくては悪いことをしたやうな氣がします。家を出るとき大變お邪魔になりました。必ずやつて來ますと出て來たにも拘らず命令が出なくて歸つてくるとき、隊長殿からいはれたやうに沖繩決戦には飛行機が悪かつたら腕が悪かつたら肚でぶつつかる。

大場准尉

いまの心境はさうですね、私はここに來てから實に感じてゐることで

すが、この戦局は逼迫すると日本人は必勝の信念をもたなければいけない、精神一つになるものと私は思ふ。四、五日前までは悲観的感情をもつたことがあります。かうしてやつて来て見ると緊張した毎日がつづき必ず勝つといふ信念が自から沸いてきました。元元悲観論者は緊張を欠いてゐるのです。

一同
全くだ。

新聞、ラジオによりサイパンの全員戦死、天王山レイテの戦場が間もなく沖繩に移つて國民の中に戦局を悲観的に考へるものがあつたが、いま俺たちが靜かに考へてみると戦勝は必ずわれにあると考へる、これは絶対のことでありませぬ。俺たちがいま特攻隊として征く、そして必ず敵のかいのをやつつけるために、つぎからつぎへと俺たちのやうなものがかぎりなくつづいてくる、一億が特攻隊としてくると確信してゐる。俺たちは安心して出發することができぬ。

俺も同感だよ。

自分が特攻隊として出てゆくことはただ軍人の本分を完了する氣持だけであつて別に他念はありません。

日本人全體として國民はみな特攻精神をもつてゐる。しかし飛行機が

まだ足りない。國民もよく銃後で飛行機生産をやつてくれるが、いまの戦局からいふとまだまだ足りない。飛行機がなくて泣くことがある。飛行機を作つてゐるものを叱つてやりたいやうだ。

心配するな、俺が出發して敵の船の横腹に近接してあらゆる方法を講じて敵を撃沈させて見せる。

名古屋の上空を通つたとき、爆撃のため名古屋を焼いてゐるのを見たとき、全く申譯のないやうな氣がしましたが、この取り返しは必ず空母撃沈によつて取り返してやらうと思つてゐます。

(放送は更に続いたと思われませぬが、新聞記事はここで終わつていませぬ。なお、文中、原文のまま旧仮名づかいにしました。また、可能な限り旧字体を使用しました。)

部下たちは、一死必沈、空母撃沈など、特攻への決意を語つていますが、片岡隊長は立派な部下たちをどう死なせるかという苦勞を語つていませぬ。操縦技量抜群の部下たちとはいへ、搭乗する特攻機は99式高等練習機。515馬力(実用機の一式戦闘機は1,150馬力、最新鋭の四式戦闘機は1,825馬力)、最高速度349km/h、航続距離約1,000km、250kg爆弾を搭載するので、2人乗りの機体に5人搭乗するよなもので、離陸さえ思うやうにできませぬ。やつとの思いで離陸しても、速度は200km/hが限界で、最高速度600km/hを超える米軍戦闘機のグラマンF6Fヘルキャット

やノースアメリカンP51マスタングに



99式高等練習機(99高練)
陸軍の特攻に使用された機種は重爆撃機から戦闘機、さらには旧式の固定脚97式戦闘機や95式中間練習機(通称赤トンボ)まであらゆる機種が動員された。99式高等練習機は特徴のある低翼単葉機で、95式中間練習機から実用機に進む中間過程の練習機として広く使用された。
乗員2名 全長8.92m 幅11.80m 自重1,247kg
発動機ハ13甲 515ps

迎撃されればひとたまりもありません。隊員たちは、実用機で出撃すれば敵艦を攻撃、戦果を挙げて帰還できる技量の持ち主だけに、練習機で出撃する部下たちを思うと、片岡隊長はなんとか敵艦に体当たりさせたい、無駄死にだけはさせたくないといふ心と心を痛めていたものと思われませぬ。本来ならば指揮官は作戦と同時に、部下をいかに生還させるかを考えるものですが、立派に死なせることを第一としなければならなかつた片岡中尉の氣

持ちを推し量ると、戦争の持つ不条理がより一層身にしみませぬ。

録音を終えた片岡隊長は、兄の岡山軍曹を見送りにきていた妹のよし子さんと会い、取り急ぎ自分の名刺の裏に奥様の重子様へ次のような別れの言葉を記し、よし子さんに託していませぬ。

重子様 元氣に暮らせ
父は強く征きます
子供と共に日頃の心掛け通り
達者で

四月十九日 喜作

片岡隊長は翌20日の早朝、知覧への出発前に妻子と両親宛の遺書をしたため、郷里に送つていませぬが、もし遺書が家族のもとに届かなかつた場合を考えて、名刺をよし子さんに託したものと思われませぬ。

この名刺は、1987(昭和62)年6月28日に開催された「全陸軍航空部隊陣前祭」の式典で多くの遺族を代表して、「英霊に捧げることば」を片岡重子さんが述べられました。その際に傍らに付き添つておられた岡山よし子さんから重子さんに手渡され、その後靖国神社に奉納されました。(高21回 松井泰寿)

創立六十周年の昭和三十二年に作成した校旗は、劣化が進んだため、この度、新調しました。
来る二月二十九日、同窓会から学校への贈呈式を実施します。